

エスツェット

清水らくは

ねえ、君となら

君が見付けてくれた湖で。

僕は間違っって黒い服を選んでしまいました。君は生真面目に「死に装束なのに」と言って、白いTシャツを着てきたのに。僕はまた間違っってしまいました。それでも君は、僕を許してくれます。

君が見付けてくれた湖は、とても澄んでいるけど、世界一綺麗ではなさそうだから、好き。そして君も、世界一ではないけれども、とっても綺麗です。

でも、二人は途方に暮れました。入水自殺のやり方がわからなかったからです。

「ゆっくり入ってくの？ 苦しくなって戻ってきてしまうわ」

「でも、飛び込むような場所もないよ」

「困ったなあ。経験者に聞いてくるんだった」

仕方ないので、二人でビスケットを食べ始めました。指をなめる君の仕草が僕は大好きです。

「かえろっか」

君は言いました。

「そうだね。帰ろうか」

僕も言いました。

「帰りのチケット、ないや」

「そうだね。でも、ねえ……」

「ん？」

「君となら、歩いて帰ったっていいよ」

君は、いつもどおり僕に微笑んでくれました。僕は、今日も幸せです。

今日も、星は小さく瞬いていた。

思い出すことも尽きた。それでも、いつものように過去を振り返るぐらいしか、することがない。

幼い頃は、優等生だった。いつも成績は学年一位、一番有名な大学に行った。

でも、そこでは普通の人だった。天才たちの内では、平凡な天才だと思い知らされた。そして初めて、運動もできないし、ルックスもよくないことを意識した。僕は、とんだ勘違い野郎だった。

それでも自分がすごいんだということを知らせたくて、企業を作った。すぐにこけた。借金だけが残った。

「応答求む、応答求む」

「はい、今日も順調。星は小さいです」

一体何日前のものになるか分からない通信に答え、回想を再開する。

大学を辞め、借金返済のためにあくせく働いていたが、とてもじゃないがどうにもならなかった。だから僕は、当時募集していた「宇宙飛行士」に迷わず応募した。

審査は簡単に通った。応募者の中で最も高学歴で、最も借金が多かったからだ。

家族や友人が泣いたかどうかは分からない。でも僕には関係なかった。僕は、行き先不明の宇宙船の、ただひとりの乗組員になった。

毎日、定期的に報告するのが主な仕事。いつか、新しい星にたどり着いたら、万々歳だ。そのときはできるだけその星の情報を収集して、何とかして自分の星に帰るのが仕事だ。

何とかできるものか。

さいしょっから、この船で死ぬことが僕の仕事だ。

「アウトウモトムアウトウモトム」

しかし、僕の耳に聞きなれない通信が入ってきた。断る理由はない。

「はい、なんでしょうか」

「オマエモツミビトカ、ガンバレヨ」

通信は、ぶつりと切れた。

どこの星でも、宇宙飛行士は暇人なのだろうか。

天空の門

ある日、宇宙からの強い光線によって、天使たちが滅びてしまった。そのため神々は、仕方なく悪魔たちに助力を願った。

ある悪魔は言った。

「いい気味だ、どうせならお前たちも滅んでしまえばよかったのに」

またある悪魔は、こう言った。

「天使の仕事に耐えられるなら悪魔になってねーよ」

さらにある悪魔は言った。

「うぜえよ」

結局神々は、これまで天使たちが行っていたことを自分たちでしなくてはならなくなった。

ある神は言った。

「こんな激務には耐えられない」

またある神はこう言った。

「これでは神か奴隷か分からん」

さらにある神は言った。

「だりい」

こうして鬱憤の溜まった神々は、他の神々を支配して自分は楽をしようと考えた。神々は天使の仕事ばかりか、本来の任務も全くせずに争いばかりを繰り返した。大地は荒廃し、人々の間には悪が蔓延した。世界は無茶苦茶になってしまった。

何百年もの間争いが続いた後、ようやく一柱の神が頂点に君臨し、他の神々を従えることに成功した。しかしその時にはもう、人々どころか、全ての生物、そして悪魔までもが死に絶えていた。

神々にはもはや、するべき仕事が残されていなかった。以来、神々は天空の門にがっちりと錠をかけ、大地に降りてこようとはしなくなった。

今も神々は天空で生きているとの話だが、彼等を神々と呼んでいいのかさえも疑わしいものである。

ありがとう

カレーから生まれたカレー太郎と、コーラから生まれたコーラ太郎と、近所の川島太郎は、旅に出ました。

ある日、おなかのすいた子供がいました。カレー太郎はカレーを作ってあげました。

「ありがとう、カレー太郎！」

子供は嬉しそうにお礼を言って去っていきました。

またある日、のどが渇いている子供がいました。コーラ太郎はコーラを作ってあげました。

「ありがとう、コーラ太郎！」

子供は嬉しそうにお礼を言ってげっぷをしながら去っていきました。

「いいなあ、二人は」

川島太郎は言いました。

「困った人たちに感謝されて」

「そんなことないよ」

コーラ太郎は言いました。

「川島君もいつかきっと感謝されるよ」

その後も三人はずっと旅をしました。でも、川島太郎が感謝される日は来ませんでした。

「僕、帰るよ」

ついに川島太郎は、二人に言いました。

「僕はやっぱり、二人とは違ったんだよ」

カレー太郎とコーラ太郎は、悲しみながらも、川島太郎を見送りました。

川島太郎が家に帰ると、たいそう喜んだお母さんが言いました。

「帰ってきてくれたんだね、太郎」

あまりにもその顔が嬉しそうだったので、太郎も満面の笑みを浮かべて言いました。

「うん。僕は家にいるのが一番幸せなんだ」

その後川島太郎は、平凡ながらも幸せな一生を過ごしました。

大阪少年(セカンドボーイ)

彼の腕は黒く焦げている。
私を抱くときだけ、少し冷たくなる。

阿部野橋の裏路地、きっと卑猥な空間。
けれども二人は、ただ抱き合うだけ。

路電のブレーキ音、途切れた。
彼の心から染み込んでくる想い。
私を愛していない証を込めた愛情。
痛みを吐き出せるのは、お互いに無償を求めないから。

「暑くなってきたよね。夏ももうすぐ」
誰に対して喋っているのだろう、不自然な言葉。
それでも彼は答えることを厭わない。
「夏休みになったら、海でもいこうや」

mioで時間を潰す。
腕を組むのは見せ付けたいから。

汗を吸った白い制服。
彼からは、男子校生特有の耽美な匂い。
思わず顔を近づける。
いちゃついているみたいに見えるんだろう。

携帯にメールの着信。
彼はいつも気にしない振り。
でもね、知ってる。
こっそり少し嫉妬していること。

自慢の彼女。
誇らしげに紹介するから、ちょっと照れた。
分かってる、彼の友達がどんな風に見てるか。
そうよ、これはただの遊びだから。

東京の彼はもちろん私の一番。
でも、面白いことは何一つ言わない。

「なあ、ずっとこのままでええんか？」
突然不安がったりして、少し戸惑った。
ソフトクリームが鼻に付きそうになる。
「じゃあ、どうしたいの？」

「好きな人、できた」

突然、崩れかけた積み木。
いつかはこうなると分かっていたけれども。

「お互いに好きな人がいるんだから、これでおしまいね」
気付かないで、私震えてること。
「そんな簡単にいくんやったら、ええけどね」
気付いてる、彼も震えてること。

その夜、抱き合うだけではすまなくなった。
二人は、無償の愛を求めてしまった。

朝は来なかった。
長い沈黙が、結論を延ばしつづけた。

彼の手を強く握った。
でも、彼の心にはもう触れられなかった。

大観覧車から、大阪の町を眺めた。
一番好きな人は、ここにはいない。
彼はいつまでも、一点を見つめる。
一番好きな人が、そこにいる。

切なく苦い、キスを交わした。
「さよなら。ずっとげんきでね」
涙を隠す暇なんてなかった。
「ああ、俺はいつでも元気や！」